学校だより　NO．９
令和　６年　１月号
昭島市立武蔵野小学校
校長　大河原　博
武蔵野小 HP

武蔵野

どうやって子供を褒めますか。

校長　大河原　博

新年あけましておめでとうございます。みなさまご健勝にお過ごしでしょうか。令和６年が始まりました。本年も武蔵野小の子供たちを、どうぞよろしくお願いします。

さて、有名な心理学の実験ですので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、１９９８年コロンビア大学の心理学者Ｃ．ミューラー教授とＣ．デュエック教授が「褒め方」に関する興味深い実験結果を発表しました。公立小学校の１０歳から１２歳の子供たち４００人を対象に、4回のテストを実施し、その際の声掛が成績にどのように影響するかを調べたものです。

一回目のテストでは、簡易なテストを受けさせ、成績にかかわらず全員に「８０点以上だった」と伝えます。

その後、無作為にＡ・Ｂ・Ｃの三つのグループに分けます。

Ａのグループには、「頭がいいね」と**能力を褒め**ます。
Ｂのグループには、何も褒めません。
Ｃのグループには、「よく頑張ったね」と**努力を褒め**ます。

二回目のテストでは、最初のテストより難しいが挑戦すればとても勉強になるテストと、一回目と同じくらい簡単なテストの２種類を用意し、どちらのテストに取り組むか各自に選ばせました。

すると、Ａのグループ（能力を褒められた子供たち）の３５％しか難しいテストを選ばなかったのに対し、Ｂのグループは児童の５５％、Ｃのグループ（努力を褒められた子供たち）では９０％が難しいテストに挑戦したのです。
「頭がいいね」と**能力を褒められたグループの子供たちは、自分の能力を認めてもらうため、失敗しない簡単なテストを選択**する傾向が生じました。一方、プロセスや**努力を褒められた子供たちは、努力すれば褒められると思い、チャレンジする選択**をしたのです。

三回目のテストでは、全員にとても難しいテストを受けさせます。もちろんどのグループでもよい結果を残した児童の数はわずかでしたが、結果に対する子供たちの考え方にＡ・Ｃのグループで違いが表れてきました。

テストの結果について、**能力を褒められたＡグループは「自分には能力がないから」と自己分析**し、**努力を褒められたＣグループでは「自分の頑張りが足りなかったから」と考える**傾向が表れたそうです。

さらに、衝撃的なのはこの続きです。この難しかった三回目のテストの自分の成績を、匿名で発表させたところ、Ａのグループでは約４０パーセントの子供が実際より高い点数で報告し、Ｃのグループでは、ほとんどの子供たちが正直に報告したそうです。

最後の四回目のテストでは、最初と同じくらいの難易度のテストを受けさせました。

最終的に、能力を褒められたＡグループは２０％得点が下がり、努力を褒められたＣグループでは３０％も得点が上がりました。子供たちの中で何が起きたのでしょう。

ポイントは三回目のテストの捉え方です。能力だけを褒められた子供たちは、「自分には能力がない」と自信をなくし、モチベーションが下がってしまったと考えられます。新たな努力に気持ちが向かなかったのかもしれません。また、自分の成績を水増しするなど、良い成績という結果のみに固執する姿も見られます。対して**努力を褒められた子供たちは「努力が足りなかったせいだ、もっと頑張らなければ」と考え、一層努力**するようになり、4回目の結果につながったと分析されています。

本校でも、子供たちの頑張りやプロセスを褒め、良い成績をとることを目指すのではなく、**学びそのものとチャレンジすることに喜びを感じる児童**を育成していきたいと思います。